

# お茶うけ 第97話

## 明治の改暦 天保暦(太陰太陽暦)より太陽暦へ (その2)

明治政府は、明治5年(1872年)11月9日に、改暦の詔書とともに、太政官の「改暦布告」を出して、「日本の暦をそれまでの天保暦(太陰太陽暦、以下、旧暦または太陰暦とも呼びます)から、欧米諸国と同じ太陽暦(新暦)に改める」と国民に知らせました。

主な内容は、次ぎのようなものでした。

1. 来る旧暦の12月3日を、新暦の明治6年1月1日とする。
2. 1年を365日とし、それを12カ月に分ける。4年毎に1日の閏日を置く。月の呼び名は、1月、2月、...12月とする。月の日数は、1、3、5、7、8、10、12月の各月を31日の大の月とし、2、4、6、9、11月の各月を30日の小の月とする。特に、2月は平年を28日とし、閏年は29日とする。大の月、小の月は毎年変わることはない。
3. 時刻は、これまで1日を12時に分けていたが、今後は24時に分ける。従来の子(ね)刻から午(うま)刻までを12時に分けて、午前何時と呼び、午(うま)刻から子(ね)刻までを12時に分けて、午後何時と呼ぶ。[旧暦では、1日を12時に分けて十二支を当てて数えた。夜半を子の刻として数え始め、真昼を午の刻と数えた。その1時(ひととき)は今の約2時間に当たる]



当時の人びとは改暦の布告を受けて、慣れ親しんできた旧暦が新暦に変わり、しかも年末の旧暦の12月が2日だけで終わり、12月2日の夜が明けると、いきなり新暦の1月元日になることに大変驚きました。旧暦で育った人びとは、月の朔日(ついたち)は新月が、15日には満月が空にかかるものと思いこんでいましたので、新暦になって満月の夜が15日とは限らないと聞いて戸惑いました。

この明治の改暦に、後に早稲田大学の創立者となる大隈重信は政府の参議として、また、すでに慶應義塾を創設していた福澤諭吉は啓蒙思想家として、深く関係していました。参議の大隈重信は改暦を積極的に推進しました。一方、福澤諭吉は、暦が太陽暦になると聞かされて戸惑っている人びとに向け、「改暦弁」を書いて、旧暦と太陽暦の違いや、太陽暦と日常生活の関係などを分かりやすく説明したのです。

明治の改暦を推進した大隈重信は、「大隈重信回顧談」の中で、それが必要であった理由を語っています。その幾つかを紹介します。

### 1)財政上の問題

旧暦では、2~3年毎に1回必ず閏月を置くので、閏月のある年(閏年と呼ぶ)は1年が13カ月となる。従って、国の年度予算も、閏年は平年よりも1カ月分増額しなければならない。例えば、幕藩時代は官吏の俸給は年俸制であったが、明治になって月俸制にしたので、閏年は俸給などの支出が、平年よりも1/12だけ増えた。ところが、当時の国家の収入は主に土地関係からのものであったので毎年ほぼ一定である。また、財政事情は、非常に切迫していて、平年に前もって閏年分を見越して蓄えておく余裕が無かった。しかも、明治6年(1873年)は閏月があったので予算を1/12だけ増額する必要があった。そこで財政危機を救うために、閏月の無い新暦に改暦したのである。

(筆者注:すでに、明治元年と明治3年に閏月があり、政府は財政上の苦しみを経験していた)

### 2)諸官省の休日の問題

当時の諸官省の定休日は、1、6の日と定められていた。すなわち、各月の1、6、11、16、21、26の日が休日、月に6回、年に72回の休日があり、それに、5節句、大祭祝日を加えると、年間の休日が百数十日となった。天保暦では、1年が354日であるので、その2/5は休んでいることになる。これでは政務が渋滞して国家に禍を及ぼしかねない。改暦にともない、休日は週に1回とし、日曜日を当てることにした。これで年に72回の休日が52回に減った。

### 3)諸外国と交渉する場合に不便を感じる問題

当時、外国とのさまざまな交渉事が多くなっていて、交渉相手と休日が一致しないので、交渉を滞らせることもあった。

(筆者注:外国と締結する条約文書や、関連する文書に、西暦(太陽暦)の暦日と、天保暦の暦日を併記する必要があり煩雑であったと思われる)

福澤諭吉は、改暦を知らされて戸惑う人びとの不安を取り除くために「改暦弁」を書きました。

「改暦弁」では、太陰暦と太陽暦の違いや、改暦が必要な理由などを解説し、さらに改暦後の新暦での日常生活について具体的に説明しました。「改暦弁」は非常に分かりやすく書かれていたので、太陽暦初日である明治6年1月1日に発売されると、たちまち評判になって数十万部が売れ、他の改暦関係の群書を押さえて、ベストセラーになりました。(福澤諭吉は、太陰太陽暦である天保暦のことを太陰暦と呼んで説明している)

「改暦弁」の内容を幾つか紹介します。

### 1)太陽暦と太陰暦の違い

太陽とは日輪のこと、太陰とは月のことであり、暦(れき)とはこよみのことである。太陽暦は日輪を本(もと)として立てたこよみで、太陰暦は月を本として立てたこよみである。

太陽と地球と月の運行を説明する図を示し、さらに当時の人びとの身近にあるものを使って、1日の昼と夜の仕組み、1年に春夏秋冬の時候の変化が起きる理由、太陽暦と太陰暦とでは1年の日数が違うことなどを分かりやすく説明した。従来の太陰暦は月の満ち欠け(朔望)を基準にしている、暦日と季節がずれることがあるので、その暦日に従っていると農作業の時期を逃してしまふ。そこで、良い時期に農作業をするために、こよみに書き加えられた二十四節気の彼岸や、雑節の入梅、土用が必要であった。

新しい太陽暦は太陽の動きを基準としているので、暦日と季節との乖離が無く、春分の日は毎年3月21日と決まっている。太陽暦になれば、毎年同じ暦日に同じ季節が巡ってくるので、二十四節気や雑節に頼る必要がなくなる。その点、太陽暦の方が優れている。

## 2)太陰暦の閏月に関する話

太陰暦では何年かに1回閏月があり、その年は1年が13カ月になる。1年の給金(年俸)が10両の奉公人は、1年が12カ月の間も10両、13カ月の間でも10両なので、閏月の1カ月はただで奉公することになる。もし雇い主が閏月に10/12両払えば、給金を余分に払うことになる。このように、太陰暦ではどちらか一方が損をすることになる。

## 3)月(month)の話

太陽暦は、1年を12に分けて12カ月とすると、1月、2月など各月の名前と英語名の仮名読み(例えば、1月はジャニエリ、2月はヘブリユエリ、など)を列記した。また各月の日数(31日、30日、但し2月は28日)を示した。

3、4、5月を春、6、7、8月を夏、9、10、11月を秋、12、1、2月を冬とする。

## 4)週の話

西洋では、7日を1区切りにして1ウヰキ(week、週)と名付け、世間日用のことは、だいたい1週間単位で勘定している。例えば、日雇いの賃金や借家賃などを、週単位で決済する。ちょうど日本で月の晦日を決済の期限とするのと同じである。1週間の曜日の名を、日曜日、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日と説明し、それらの英語名の仮名読み(例えば、日曜日はソンデイ、月曜日はマンデイ、など)を列記した。日曜日は休日で商売も勤めも休む、その様子は日本の元日のようである。

## 5)時計の見方

西洋では、1昼夜を24時に分けるので、1時間が日本の旧暦の半時(はんとき)に当たる。その半時を60に分けたものを1分時(ミニウト)という。またこの1分時を60に分けたものを「セカンド(秒)」という。

時計について、円を12等分して時を示す数字を描いた文字盤上に、1本の短針と1本の長針がある図を示した。時計の基本動作と、短針と長針の位置から時を読み取る方法を丁寧に説明した。

私は、『改暦弁』に書かれた、身近な事柄をうまく取り入れた具体的で分かりやすい説明に感心しました。福澤諭吉は、この『改暦弁』を書く10カ月ほど前の、明治5年2月に『学問のすすめ』の初編を出版しています。その中で、福澤は「実学の効用」について、「どんな種類の学問でも、事実そのものの客観的把握が第一である。対象に即して、そのもの自体の働きを見きわめなければならぬ(それがいわゆる科学精神である)。わが身近な所に自然の法則を発見して、それを現実生活に活用することこそ、最も肝要である」と説いています。(『現代語訳 学問のすすめ』伊藤正雄訳 現代教養文庫 p-15より)

私は、人びとの現実の生活に役立つことを念頭に置いて書かれた『改暦弁』は、『学問のすすめ』の実学の精神を如実に表している本であると思いました。

以上

## 参考文献:

『改暦弁』福澤諭吉著 明治六年一月一日発行 慶應義塾蔵版)セイコー・ライブラリー叢書 3 昭和53年11月発行(非売品)

『現代語訳 学問のすすめ』伊藤正雄訳 現代教養文庫 953 社会思想社刊 1977年6月15日 初版 第1刷発行

『暦と時の事典』内田正男著 雄山閣刊 昭和61年5月5日 初版第1刷発行

『暦の百科事典』暦の会編 (株)新人物往来社刊 昭和61年4月25日 第1刷発行

『世界大百科事典』平凡社刊 1972年4月25日 初版発行

『日本語大辞典』講談社刊 1989年12月1日 第2刷発行

『明治の改暦 - 「時」の文明開化』岡田芳朗著 (株)大修館書店刊 1994年6月10日 初版発行

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンストソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。